

船橋市西図書館蔵「下総之国図」と越ヶ谷会田氏

秦野 秀明

はじめに

越谷市内にはかつては「利根川」の本流であった「元荒川」、「古利根川」という二つの河川が存在している(1)。

この二つの河川がかつての「利根川」の本流であったことは、関東地方では「利根川」流域にしか存在しない「河畔砂丘」が、越谷市内の「元荒川」流域(流路跡を含む)に五ヶ所、越谷市と境界を接する松伏町内の「古利根川」流域に二ヶ所存在することにより、その事実を証明している(2)。

しかし、「利根川」の本流であった「元荒川」、「古利根川」という二つの河川も、近世以降の江戸幕府による「利根川東遷事業」により、「利根川」の旧河道の一つとなった。

近年、「利根川東遷事業」以前の段階である中世戦国期の「利根川」流域史に関して、争点となっている中世戦国期における「利根川」を中心とする東国水運をはじめとして、様々な研究成果が発表されている(3)が、史料の不足などにより「利根川東遷事業」以前の近世初頭の「利根川」の旧河道については、不明な点が多いのが実情であった。

そのような状況下で、平成十四年(二〇〇二)に出版された『幸手市史 通史編I』(4)の編纂に関わる「幸手市史編さん室」の調査によって確認されたのが、近世初頭の「下総国」の状況を描いたと推測される「船橋市西図書館」蔵(5)の「下総之国図」である(6)。

今回、新井浩文氏の論文「戦国期関宿周辺の河川と交通―船橋市西図書館蔵「下総之国図」の史料紹介を通して―」(7)を引用して、「下総之国図」に関する簡単な紹介を行い、さらに、同氏の論文「関宿会田家文書の再検討―関宿城下有力商人会田家と網代宿―」(8)を引用して、「旧利根川水系」と「越ヶ谷会田氏」との関係に関する簡単な紹介を行う。

一 船橋市西図書館蔵「下総之国図」

新井氏は、その論文「戦国期関宿周辺の河川と交通―船橋市西図書館蔵「下総之国図」の史料紹介を通して―」(7)において、「下総之国図」の全体の概要及び特徴について次のように述べる。

(1) 全体の概要について

「下総之国図」は、下総国一国を描いたもので、大きさは、縦一九六・三センチ×横九七センチある。「下総之国」という文字が画面右隅、及び裏面に墨書されており、いわゆる幕府作成による諸国国絵図(慶長・正保・元禄・天保)との関係が想起されるが、諸国国絵図を持つ国絵図としての特徴と合致する部分が少ない点が目される。

(2) 「下総之国図」の特徴

- ① 江戸川がない(寛永一八年(一六四一)以前)
- ② 近世幸手領が下総国にある(寛永一四年(一六三七)以前)
- ③ 近世幸手領が猿島郡に属している(寛永四年(一六二七)以前)
- ④ 高須賀村(現幸手市高須賀)がない(寛永二年(一六二五)以前)
- ⑤ 赤堀川がない(元和七年(一六一五)以前)
- ⑥ 日光道中がない(元和三年(一六一七)以前)
- ⑦ 戦国期の城郭がほとんど描かれており(元和期以前)、各城郭間が連絡路で結ばれている。
- ⑧ 近世村落成立以前の村名がみられる(新田開発村が無し||寛永以前)
- ⑨ 戦国期に成立し、近世初頭に消える関宿「網代宿」がある(元和元年以前)

⑩権現堂川と逆川が繋がって描かれている。(9)

また、新井氏は、同論文(7)において、中世戦国期の「利根川」水系と、銚子へ向かう「常陸川」水系が関宿で繋がっていたか否かを論じる上で、重要な論点となってきた「逆(さかさ)川」に関して、「下総之国図」を用いて次のように述べる。

「下総之国図」では、浅間川筋から、近世の島川筋にあたる現在の中川の流れと、思川(現在の渡良瀬川)から古河城を通り、現在の権現堂川を通って来る流れが栗橋城の対岸である権現堂堤周辺で合流し、そのまま東に向かって一部は先述したように、三本の河川となつて春日部方面へ南流し、一本の本流は逆川へと続いて関宿城の北側で現在の利根川筋と合流している。よつて、「下総之国図」上では、明らかに、利根川水系と常陸川水系は関宿で繋がっているのである。(10)

二 「旧利根川水系」と「越ヶ谷会田氏」との関係

「利根川」水系と「常陸川」水系が、関宿で繋がっていたのであるならば、「旧利根川水系」の流域に居住した「関宿」(千葉県野田市)、「越ヶ谷」(埼玉県越谷市)、「葛西」(東京都葛飾区・江戸川区)の会田氏の繋がりが見えてくる。

新井氏は、論文「関宿会田家文書の再検討―関宿城下有力商人会田家と網代宿―」(8)において、会田氏について次のように述べる。

なお、会田氏の出自については先の萩原氏や佐藤博信氏が、『小田原衆所領役帳』に載る葛西会田氏との関係から関宿会田氏との繋がりについてそれぞれ言及されている(11)。萩原氏によれば、会田氏は信濃出身で利根川沿いに南下、関宿周辺に広がった後、分派が葛西御厨周辺と岩付太田氏家臣として越谷に、それぞれ居住したとされる。また、佐藤氏は会田氏が上杉氏家臣として上杉領葛西御厨に入部したのは、同氏の氏族としての専

門職能に商業・流通的側面によるものとしている。葛西(東京都江戸川区・葛飾区)・越谷(埼玉県越谷市)ともに旧利根川水系の地であり、葛西と関宿間が水運でむすばれていることから考えると興味深い指摘である。(12)

むすびにかえて

以上、「下総之国図」及び「旧利根川水系」と「越ヶ谷会田氏」との関係に関する簡単な紹介を行ったが、「下総之国図」に関するその他の論考には次のようなものがある。

- ①新井浩文「戦国期関宿周辺の河川と交通―船橋市西図書館蔵「下総之国図」の史料紹介を通して―」『千葉県立関宿城博物館研究報告』第六号、千葉県立関宿城博物館、二〇〇二、一八〜二四頁。以下、『同書』からの引用は『関研』とする。
- ②新井浩文「第五節 幸手一色氏と幸手周辺の河川・陸上交通」『幸手市史 通史編Ⅰ』、幸手市教育委員会、二〇〇二、二二八〜二三六頁。
- ③原太平「第一節 河川の改修と用悪水路の整備」『幸手市史 通史編Ⅰ』、幸手市教育委員会、二〇〇二、三六四〜三八〇頁。
- ④大谷貞夫「近世における関宿周辺の治水事情」『千葉県史研究第一〇号・別冊房総の近世Ⅰ』、千葉県、二〇〇二。
- ⑤新井浩文「戦国期関宿周辺の河川普請―権現堂堤の修築を中心に―」『関研』第八号、二〇〇四、一〜一〇頁。
- ⑥千鳥絵里(日本女子大学文学部史学科卒業論文)「船橋市西図書館蔵「下総之国図」に関する基礎的研究」、二〇〇四。(「船橋市中央図書館」所蔵)。
- ⑦千鳥絵里「下総之国図」に関する基礎的研究『史艸』第四六号、日本女子大学史学研究会、二〇〇五、二四八〜二六〇頁。

⑧ 滝口昭二「下総之国図」について―その成立年代を探る―

『房総研究』第四二号、千葉地理学会、二〇〇五。

⑨ 新井浩文「戦国期の利根川水運と城郭

―江戸川開削以前の中世利根川考―

『関研』第九号、二〇〇五、四九〜五二頁

⑩ 新井浩文「戦国期の関宿城と町場形成

―近年の関宿城下構造に関する論考に触れて―

『関研』第一二号、二〇〇八、一〇九〜一一八頁。

⑪ 新井浩文「戦国期の利根川流路と交通

―栗橋城と関宿城の機能を中心に―

『関研』第一五号、二〇一一、二四〜三四頁。

脚注

(1) 代表的なものとして、

本間清利『利根川』、埼玉新聞社、一九七八。

※「利根川」の初出は、『類聚三代格』承和二年(八三五)

六月二九日)の「住田河」。

※参考までに拙稿、

秦野秀明「越谷市内を流れる元荒川は元・利根川だった」

『古志賀谷』一五号、NPO法人越谷市郷土研究会、

二〇〇九、一〇六〜一〇九頁。

(2) 平社定夫・佐藤和平「第一章第一節四 河畔砂丘」

『中川水系 I 総論・II 自然』、

埼玉県、一九九三、八二〜一一八頁。

(3) ① 峰岸純夫「中世東国水運史研究の現状と課題」

『中世東国の物流と都市』、山川出版社、一九九五年。

一三〜四六頁。

② 峰岸『同書』所収の研究文献目録。

③ 久保田昌希・小松寿治

「中世利根川流域史研究の成果と課題(上)」

『葦のみち』一〇号、三郷市、一九九八年。

④ 久保田昌希・小松寿治

「中世利根川流域史研究の成果と課題(下)」

『葦のみち』一三号、三郷市、二〇〇一年。

(4) 生涯学習課市史編さん室/編『幸手市史 通史編I』、

幸手市教育委員会、二〇〇二年。

(5) 二〇一一年九月一〇日現在、諸事情により、

「船橋市西図書館」より、「船橋市中央図書館」へ移設された。

(6) 「下総之国図」に関する、各地の博物館・資料館における

企画展等

① 「平成十三年度企画展 戦国の争乱と関宿」

(千葉県立関宿博物館、二〇〇一年)。

② 「企画展 中世の東葛飾―いのり・くらし・まつりごと―」

(松戸市立博物館、二〇〇一年)。

③ 「平成十三年度企画展 中世の船―掘る・読む・たずねる―」

(船橋市郷土資料館、二〇〇二年)。

④ 「特別展 江戸川誕生物語」(野田市郷土博物館、二〇〇二年)。

⑤ 「特別展 川の道 江戸川」(松戸市立博物館、二〇〇三年)。

(7) 新井浩文「戦国期関宿周辺の河川と交通

―船橋市西図書館蔵「下総之国図」の史料紹介を通して―

『関研』第六号、二〇〇二、一八〜二四頁。

(8) 新井浩文「関宿会田家文書の再検討

―関宿城下有力商人会田家と網代宿―

『関研』第三号、一九九九、三〜一二頁。

(9) 前掲注(7)、一八・一九頁。

(10) 前掲注(7)、二〇頁。

(11) ① 萩原龍夫「後北条氏の葛西地域支配について」

『関東戦国史の研究』、名著出版、一九八〇、六〜二四頁。

② 佐藤博信「下総葛西地域における上杉氏家臣の軌跡

―特に奥津・菊地・会田の諸氏をめぐって―

『埼玉県史研究』第三三号、埼玉県立文書館、

一九九八、五一〜六八頁。

(12) 前掲注(8)、六・七頁。



「下総之国図」のうち市域周辺分(船橋市西図書館蔵)
原太平『幸手市史 通史編Ⅰ』、
幸手市教育委員会、2002、365頁
を転載



図 5 1 「下総之国図」に描かれた主な道と河川
 新井浩文『幸手市史 通史編 I』、
 幸手市教育委員会、2002、230頁
 を転載